

## 子宮内膜症における重度の疼痛症状は生殖補助医療の治療成績には影響しない

Endometriosis-related infertility : severe pain symptoms do not impact assisted reproductive technology outcomes.  
Maignien C et al

Hum Reprod 39 : 346-354, 2024

**背景** 生殖補助医療(ART)は子宮内膜症関連不妊の主要な治療選択肢の1つである。現在、内膜症の中核症状である疼痛とARTによる生殖予後との関連に関する報告はない。

**目的** 子宮内膜症に関連した重度の疼痛症状が、体外受精の生児獲得率に影響するかを検討する。

**方法** 2014年10月～2021年10月に、体外受精を受けた354例の子宮内膜症患者を対象とした観察コホート研究である。子宮内膜症の診断は、経腔超音波検査とMRI、手術歴がある患者では組織学的に確認された。月経困難症(DM)、性交時痛(DP)、胃腸(GI)痛等を10段階の視覚的アナログスケール(VAS)を用いて評価した。重度の疼痛症状とは、少なくとも1つの症状についてVASが7以上であると定義された。主要評価項目は、患者1人あたりの累積生児獲得率とし、単変量解析および多変量解析を用いて解析された。

**結果** 354人、711周期の子宮内膜症患者の体外受精周期が対象となった。平均年齢は $33.8 \pm 3.7$ 歳、不妊症の平均期間は $3.6 \pm 2.1$ 年であった。DM、DP、GIの疼痛症状の平均VASスコアは、それぞれ $6.6 \pm 2.7$ 、 $3.4 \pm 3.1$ 、 $3.1 \pm 3.6$ であった。242人(68.4%)に重度の疼痛症状が認められた。患者あたりの累積生児獲得率は63.8%(226/354)であった。生児出産の有無によって、VASスコアの平均値、重度疼痛を示した患者の割合は有意差を認めなかった。体外受精成績に負の影響を及ぼしたのは、年齢35歳以上( $p < 0.001$ )、AMH  $< 1.2$  ng/ml( $p < 0.001$ )であった。

**結論** 不妊症子宮内膜症患者におけるARTか手術かの選択は、痛みなどの単一の因子を考慮するのではなく、様々な側面に基づいて行うべきである。

(大分大学医学部産科婦人科学講座 麻生咲季 抄)

## CIN2の臨床経過に関するコホート研究

Clinical course of cervical intraepithelial neoplasia grade 2 : a population-based cohort study.  
Lycke KD et al

Am J Obstet Gynecol 229(6) : 656.e1-656.e15, 2023

**背景** 子宮頸部中等度異形成(CIN2)は外科的切除の適応とされてきたが、多くの国ではサーベイランスに移行してきている。しかし、CIN2退縮率の推定について、ほとんどが小規模な研究に基づいている。

**目的** CIN2における退縮率と進行率を、全国的な医療登録データを用いて明らかにする。

**方法** 1998～2020年に、CIN2に対してデンマークでサーベイランスが行われていた18～40歳までの女性を対象としたコホート研究である。CIN2以上の子宮頸部腫瘍または外科的切除歴がある女性は除外された。累積発生関数を使用し、診断後6、12、18、24カ月後の退縮率と進行率を推定した。さらに、細胞診と年齢により階層化された、24カ月以内の進行の相対リスクを推定した。

**結果** 11,056人の患者がサーベイランスを受けた。24カ月以内に6,767人が退縮、3,580人が進行し、退縮率

62.9%(95%信頼区間, 61.9-63.8)、進行率33.3%(95%信頼区間, 32.4-34.2)に相当した。ほとんどの患者(90%)が最初の12カ月以内に退縮、または進行を認めた。高悪性度の細胞診評価(AGC, HSIL, AIS, carcinoma)であった患者は、正常細胞診評価の患者よりも進行リスクが高かった(調整相対リスク, 1.58; 95%信頼区間, 1.43-1.76)。一方、30～40歳の患者と23～29歳の患者間では、進行リスクに差は認めなかった(調整相対リスク, 0.98; 95%信頼区間, 0.88-1.10)。

**結論** 今回認められたCIN2の高い退縮率は、特に低悪性度(ASC-US, LSIL)または正常細胞診評価の患者において、臨床管理が外科的切除からサーベイランスへ移行することを裏づけた。

(大分大学医学部産科婦人科学講座 麻生咲季 抄)